

【書評・紹介】

ピエール・ブルデュー著／今村仁史・港町隆 訳『実践感覚 1』

(東京、みすず書房、2012年5月、四六版、288頁、3300円＋税)

ピエール・ブルデュー著／今村仁史・福井憲彦・塚原史・港町隆 訳『実践感覚 2』

(東京、みすず書房、2012年5月、四六版、266+5頁、3300円＋税)

高 泉 拓

表紙画像

2冊からなる本書は、ピエール・ブルデューの1980年の“Le Sens Pratique” (Bourdieu 1980) の全訳である。初版は、第1部が『実践感覚 1』として1988年、第2部については『実践感覚 2』として1990年に出版された。2001年に新装版が出版され、2012年にみすず書房が他社合同の企画で再版したのが本書である。出版社に確認したところ、サイズや内容に変わりはなく、新装版から装丁や頁構成が変わっただけである。

『実践感覚 1』は、序文と第1部「理論理性批判」からなり、彼の諸概念を披露しつつ、既存の理論の中でどのように位置付けられ、その諸概念からすればどのように再定義されるかが提示されている。『実践感覚 2』は、序言と第2部「実践の論理」からなり、フィールドワークを行ったアルジェリアのカビル社会や彼の故郷ベアルンを中心に、彼の諸概念が例証されており、同時にそうした実例が、複雑だが、鮮やかに描きだされている。

ブルデューの実践論や、本書についてその内容をまとめたものでは、「実践」論では田辺 (2002)、「ポスト構造主義」ではバーナード (2005) が参考になる。本稿では、第1部第3章「構造、ハビトゥス、実践」で展開される「ハビトゥス」概念の複数ある説明のうちでも、それを構成する対立するカテゴリーの図式とその適用・操作（とりわけ第2部第3章「アナロジーの悪魔」）に焦点を当て、レヴィ＝ストロースの構造主義との相違点について述べる。最後に、原著の使い方について筆者なりの見解を述べたいと思う。尚、本稿執筆にあたっては、いくつかの部分について原著 (Bourdieu 1980) を参照している。

第1部第1章、第2章で客観主義的視点、主観主義的視点の諸限界について述べられているが、第3章で提示される彼の「ハビトゥス」概念はその対立的な立場を乗り越える。「ハビトゥス」(habitus) はラテン語で「生息地」あるいは身体の「慣習的狀態」を意味する。彼はこの概念について複数の説明をしているが、最も重要な点の1つは、それが実

表紙画像

践を生み出す、能力であると同時に感覚である（「感覚≒能力」という点である。彼が様々な機会好んで用いる事例はサッカーであり、これは彼に影響を及ぼしたウィトゲンシュタインが言語ゲームの着想を得たものでもある。そして、それはある集団＝階級（classé）で歴史的に共有されたもので、主体と客体の区別は存在せず、身体に刻印されるものであり、様々な諸活動を「生成するとともに組織化する」（構造化する）原理を有している。ある侮蔑に対して応酬したりするやり方、一家が子供の結婚相手を選ぶことは、諸現実に制限されつつも、多様なバリエーションを持ち、規則性を持ちつつも即興性をも兼ね備えている。そこにはあるパターンが規則的なものとして現れるのだが、それは集団＝階級で共有された「感覚≒能力」によって巧く調節された結果であり、規則への恭順ではないのである。

そうしたハビトゥスは、彼らが生息する諸現実から由来する世界の分類とその適用・操作を内在する。そしてそれは、ハビトゥスを通じ実践として諸現実に投げ返されることにより、諸現実は相変わることなく秩序だったものとなる。子供は、「男」と「女」と2人の人間を区別するやり方に従う中で、生殖活動の後に生まれ、それによりそうした区別が有意味かつ効果的なものとなる。ちなみに付論「家と転倒する世界」については注で彼が述べているように構造主義の枠内にあるとしているので、付論から第2部第3章へと読む順番を変える、もしくは対比すると原著の重要な点と構造主義の相違がより鮮明となる。

第3章「アナロジーの悪魔」では、その相違点が以下のように事例と共に論じられる。まず、ブルデュは実践感覚でもあるハビトゥスをはっきり描きたいならば、それが論理的には一貫していないことを示すことが重要であるという。その一貫しない論理を彼は「実践的論理」、構造主義者が求めるような精密な論理を「論理的論理」と呼んでいる。彼のアルジェリアのカビル社会でのフィールドワーク経験によれば、インフォーマントたちの世界を「乾いたもの／湿ったもの」、「男性的なもの／女性的なもの」に分割する原理、これは実践を通じてなされる対立カテゴリーの適用ともいえるが、論理的には一貫せず、場合によって矛盾に満ち、事物の意味は多義的である。そして、諸対立カテゴリーは互いに連結しつつ、儀礼、神話、労働、出産、空間構成、時間認識まで「世界を隅から隅まで貫いている」。

例えば、死の否定という実践的論理が、一家の連続性と刈り入れという労働で作動している。カビル社会では、父はしばしば自分の父の名前を最初の息子に与えようとする。これは、死したものの復活への期待である。労働においては、2年ごとの輪作が行われ、ある畑から他の畑へ期間をおき種まきから収穫が行われる。刈り入れは、自然が生み出したものの殺害であり、「死」である。しかし、同時にまた、休間期をおくことによって、死んだものがまた作物として復活するという。論理的論理からすれば、生と死は対立し、新たに生まれたものは死したものの変わりではありえない。しかし、彼らの実践的論理においては「生／死」は都合よく、状況によって異なるものの、似たような図式によって対立したりしなかったりする。そのほうが、生殖活動、家族の資産の保持、自然からの収奪を正当化する上で、安定的に彼らの欲求充足を可能にするうえで都合がいいのである。ブルデュ曰く、実践的論理は論理的計算とは全く関係がなく、緊急状態で、生か死かの問題と関わり機能する。

そして、このような対立するカテゴリーの図式は、「男性的なもの／女性的なもの」、

「湿ったもの／乾いたもの」、「生／死」等、多数存在しハビトゥスを構成する。そして、システムを構成するすべての対立は、その他のあらゆる対立と等価性の果てに結びつく。食べ物に関する「香辛料を効かせた／味のない」は、直接的に「男性／女性」に結びつくが、「空っぽの／中身の詰まった」には違う対立図式を中継点とすることによって連結する。そして、「男性／女性」といったあらゆる図式と結びつくものと、「空っぽの／中身の詰まった」といった「効果が弱い」二次的なものがあるという。日本社会においては、「上／下」が、「古いもの／新しいもの」という対立を場合によっては媒介したりしなかったりし、比較的効果の弱い「先生／生徒」と結びつくということが例として挙げられるだろうか。

レヴィ=ストロース流の構造主義とブルデュの「生成的」(générateur) 構造主義の共通点は、人間は世界の諸現象を分割し、分類することで秩序を導入するという点にある。但し、レヴィ=ストロースの場合、「構造」は要素と要素間の関係とからなる全体であって、この関係は、一連の変化の過程を通じて普遍の特性を保持するものであり、彼の関心は人類共通の規則に向けられている(小田 2009)。ブルデュのカピル社会の記述における、人びとの分割原理とその操作は、世界のあらゆるものに適用されるという点で共通はしている。だが、レヴィ=ストロースの場合、変換規則としての構造は、現実では観察されない「論理的論理」を備えたものである。これに対し、ブルデュの描く人々の分割原理とその操作は、現地人たちの時に矛盾に満ち、一貫していない諸実践を描くのにより適ったものである。そして、その不完全さこそが、人びとが目標を果たし欲求を満たすために有用であり、曖昧さ、多義性、非一貫性を巧みに用いていることを見出した。彼は規則ではなく実践に焦点を当てつつ、規則と操作を生み出すハビトゥス(「感覚≒能力」)こそ人間を語る上で決定的なものとして論じた。

ブルデュの「実践」論を理解する上で本書は必読の書であり、人類学の古典の1つとして多様な専門領域の研究に多くの示唆を与えてくれるであろう。バーナードは、2000年(訳書は2005年)に、「今日」全てのフィールドワーカーは民族誌的手法とインフォーマントの行動を説明しうるハビトゥスの探索を重ねようとしている、と述べている(バーナード 2005: 240-241)。「ハビトゥス」概念への批判で最も重要なものの1つは歴史、通時的な変化についてほとんど語っていないという点である(ハーカー、マハール&ウィルクス 1992: 297)が、この点については、平井氏が、本書の母体となった1972年『実践についての一理論の素描』から手掛かりを得ようとしている(平井 2012)。見方を換えれば、彼の議論は「いかに変わらないか」に大きな比重をおいているので、文化的なものやその用い方の恒常性・堅牢さに焦点を当てる研究、手法としては共時的視点に基づく民族誌的アプローチと親和性が高い。そして、歯磨きから神話まで、ゆり籠から墓場まで、日常的習慣とある儀礼や神話が結びついている様態、規則性を持ちつつ多様である様態を統一的に描き出す「ハビトゥス」概念の有効性は、批判的乗り越えを必要とするとしても、依然として失効していない。そのように筆者は考えている。そして、『実践感覚』の限界や問題点は、多くの古典がそうであるように、ブルデュ自身やその後研究者たちがやりきれなかった宿題といった方がより適切である。

付記

2014年から1年ぐらいかけて北海道大学の研究員や大学院生と本書の読書会を行ったが、それを何らかの形にしておきたいと考え本稿の執筆に至った。とりわけ会の企画・運営を行った小坂みゆきさんに感謝申し上げたい。

参考文献

バーナード, アラン

2005 『人類学の歴史と理論』鈴木清史 訳, 明石書店

Bourdieu, Pierre

1980 *Le Sens Pratique*. Paris: Le Éditions de Minuit

ハーカー, R./マハール, C./ウィルクス, C.

1993 『ブルデュ入門—理論のプラチック』滝本住人・柳和樹 訳, 昭和堂

平井京之助

2012 「実践としてのコミュニティー移動・国家・運動」平井京之助 (編) 『実践としてのコミュニティー移動・国家・運動』, pp.1-37, 京都大学学術出版会

小田 亮

2009 「構造主義—古典を学ぶ (4)」日本文化人類学会 (編) 『文化人類学事典』, pp.738-741, 丸善株式会社

田辺繁治

2002 「日常の実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ」田辺繁治・松田素二 (編) 『日常の実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』, pp.1-38, 世界思想社

(たかいずみ・たく／北海道民族学会会員)